
ゴミ袋

岩佐悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴミ袋

【Nコード】

N00020

【作者名】

岩佐悠

【あらすじ】

主人公の悠はごく普通の会社員の26歳の女の子。

26歳という微妙な年齢。周りも結婚していき、仕事も

それなりの事を任されるようになるそんな環境の中でただ幸せになりたいそう願う悠が

巻き込まれた悠の恋愛トラブルのお話。

始まりの始まり

「ごめん、もう悠とは付き合っていけない。

俺、悠と出会う前にいたセフレに妊娠5カ月と告げられた。」

電話の向こうでただ無機質に聞こえる大好きな彼の声。

なんでこんなこと今、私言われているんだ??

あまりにも衝撃になんの実感もない悠。

ねえ、どうして二人とも思いあつてるのに、一緒にいけないの・・・

ねえ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「久しぶりに女4人で旅行にいこうよ」

「いいねー。やっぱり温泉」

いつものノリで、旅行を決めて出発したのは今から6年前。

空を見上げれば何も変わらないし、町をみてもぼつぽつとお店が入れ替わっているくらいで何も変わらない。

でも・・・いや、何も変わらない。。。

「10代最後の恋をしてやる」とその温泉旅行で仲良し4人組のガールズトーク中に宣言した悠。

宣言通り、アルバイト先で知り合った2つ年上の隼人と付き合って6年目の冬。

6年間はあるという間で、びっくりするほど、呆気なく過ぎたが、悠の中で隼人の存在の大きさは日に日に増えていったそんな6年。

不満はたくさんあるけれど、

それでも悠は隼人が大切な存在。

そして26歳になった悠は隼人との近い未来を結婚という形で思い描いていた。

そんな6年目の冬の日。

隼人の誕生日一週間前の出来事。

2人でテレビを見ていたら隼人が一言。

「もう別れよう」

悠には突然すぎる言葉。

「えっ。なんで」

黙る隼人・・・

この6年間で最も冷たい時間が二人の中に流れていく・・・

沈黙のあとに隼人がいった言葉・・・

「強いて言うならマンネリかな？」

「えっ？でもつい4日前、電話で来週の『隼人の誕生日サプライズ企画考えた』って

言ったら楽しみにしてくれてたじゃん。なんでそんな急に？」

もう悠の頭の中は真っ白。

別れるなんて考えたこともなかった。

まったくリアルの無い世界がこんなにも身近にそして

なんの遠慮もなく自分に襲いかかるのかと冷静に考えられるくらい

悠の頭の中はポツカリしていた。

「ごめん・・・でももう別れたい」

悠は泣いた。

いままでたくさん一緒に寝てきたベッドに横になった彼を見つめながら

泣いた。

隼人は申し訳なさそうに、

悠に背を向けて、眠りにつこうとしている。

どれぐらい泣いたのだろう。

悠は煙草でいっぱいになった灰皿をみながら、

本当だったらさわやかな一日の始まりを教える携帯のアラームが遠くでなっているのをただ聞いていた。

「もう朝・・・隼人、仕事の時間だよ。」

どうして隼人はこんなつらい別れ話の後でも普通に眠れるのだろうか。男は違う生き物なのだろうか。

なんてどこかで読んだ恋愛マニュアル本を思い出しながら隼人を起こす。

泥沼の始まり

「おはよう。ずっと泣いてたの？」

別れ話をした後の朝とは思えないほど、優しい隼人。

悠は

目を真っ赤にしながら「うん」とうなづく。

「やっぱり納得できない。どうして突然？
マンネリも今に始まったことじゃない」

たしかに、どのカップルにもいえることだが、
2人は時間の経過とともに、
デートコースの単調化、連絡頻度の減少など、
たくさんのいわゆるマンネリ減少を実感していた。

「やっぱりおかしいよ。
好きな人でもできたの??？」

実は悠には隼人に近づく女の影を実感している節があった。

「あつあの同じ職場の手作りクッキー作ってきた女の子と何かあったでしょ？」

「うーん。」

黙る隼人。

そんな隼人の顔を見ながら、

もう6年もこの隼人のしぐさを見ていると、それが図星であることくらいわかるのに・・・と少し勝ち誇った気持ちになりながら話を続ける悠。

「はつきり言ってみて」

「うん・・・実はその子に告白されて、悠の事好きなのかどうかわからなくなった・・・」

「そっか・・・」

「俺、もう仕事いかなきゃ。悠は休みでしょ？」

「うん。ちゃんと話したいから帰ってくるの待ってる」

「わかった・・・」

いつもしていた行ってらっしゃいの、ちゅうはしない。

もう2度としないのかな・・・

一人ぼっちになった隼人の部屋で、

まさか失うことになるうとは思わなかった隼人との

たくさんの思い出に思いを馳せながら、

かつて同じ煙草の銘柄だと喜んだ、マルボロライトを

ただ、自分を落ち着かせる為の薬のように

新しい煙草に火をつけては消し、次の煙草に火をつけるそんな行為を繰り返していた。

失恋

失恋ってこんなだっけ・・・
6年ぶりに訪れた自分への試練・・・

昨日から眠れていないのに、
なんで眠くないんだろう・・・

何も食べて無いのに、おなかもすかない・・・

ただ頭が真っ白で、
最後という言葉だけが、ぐるぐると廻っている。

3ヶ月前、6年間付き合っていて初めて
隼人の実家に遊びに行った。

悠にとっては初めての仙台。

たくさん写真をとって、
隼人の親だけではなく、
祖父、親戚の人にも挨拶をした。

あの時たしかに隼人は
「来年あたりに結婚する」と祖父に宣言していた。

親戚の子供達を見ながら、悠も
いつか隼人との間に生まれた子供もこの中に混ざって遊ぶのかな
なんて

幸せな想像をしていた。

あの日からたった3ヶ月しかたっていないのに・・・

何故今、こんな状況になったんだろう。

人生に歯車があるとすればどこでこんな風に曲がっていったのだろう。

どうしてこんなにも大切にしてきた隼人が、

私の目の前から消えようとしているのだろう。

6年間。それは悠にとって掛けがえの無い時間であり、

永遠なんて信じていなかったが、心のどこかでもう別れたりするこ
とは無いなという

変な自信を芽生えさせるだけの十分な時間だった。

無意識に永遠というものを心のどこかで芽生えさせていたのだと
気付かされる悠。

どうして・・・

ただそれだけ。

2人とも仕事はしていたが、

隼人の仕事が忙しいこともあり、毎週末、隼人の家に泊まりにくる
のが習慣だった。

付き合っている間に就職活動をした悠は隼人と離れなくていいよう
に、

この土地で働けるようにした。

隼人がいなくなれば、悠はもはやこの土地で働いている意味さえない
のだ・・・

ふと、悠は自分の人生において隼人がどれだけ中心で世界をまわしていたのか気付いた。

それでもその事に対して悲しい思いをしたりはしない。

それはすべて悠自身が決めたことであり、

昔から男中心になる自分を認識していたせいもある。

ただ、彼から離れるには一緒にいた時間が余りにも長すぎて、そして乗り越えたものが余りにも多すぎたのだ。

部屋を見渡す。

二人の6年間の思い出の写真を見返す。

そして自然とこぼれる涙に、腫れあがったまぶた。

その腫れあがったまぶたがずっしりと悠の目にのしかかってくるその重みに
さらに悲しくなる悠。

この状況に絶えられない・・・

携帯を手に取り片っ端から友人に電話をする。

「また浮気・・・2回目。その女の事、把握してたのに、告白してくるなんて思いもなかった。」

悠はそう何度も友達に話した。

電話を切れば沈黙が流れる。

思いつく限りの友人に電話をする・・・

話をすれば楽になるかと思っただが、

どんどん悲しさが増す一方。

急に一人ぼっち。

私はどうしていったらいいのだろう・・・

6年間はこんなにあっさり終わってしまうの??

そんな時、玄関の鍵ががちゃっと開いた。

いつの間にか朝日は夕日に変わっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0002o/>

ゴミ袋

2010年10月9日14時08分発行